**The Real Lessons of the Yom Kippur War**

To Defeat Hamas, Israel Needs a New Approach to Intelligence

**By**[**Uri Kaufman**](https://www.foreignaffairs.com/israel/real-lessons-yom-kippur-war#author-info)

**October 20, 2023**

1973年にヨム・キプール戦争が終結して間もなく、後にイスラエルの首相となるメナケム・ベギン（当時は新米議員）がクネセットの議場で憤慨した。「なぜ軍備を戦線に投入しなかったのか」と彼は叫んだ。エジプトとシリアの連合軍とイスラエルが18日間にわたって戦ったこの戦争は、2,000人以上のイスラエル軍兵士の死者を出し、国の政治体制に衝撃を与え、軍の信頼に打撃を与えた。ベギンは、政府がなぜ紛争に備えなかったのかを知りたがった。

今日、イスラエル国民は不気味なほど似たような疑問を自問自答している。ハマスが10月7日、イスラエル領内で前例のない攻撃を行い、1000人以上を殺害した後、イスラエル国民は、なぜ自国の誇る情報機関がハマスの侵攻を見抜けなかったのかを知りたがっている。イスラエル軍はなぜ、ガザ国境に防御設備と人員をほとんど配置していなかったのか、と。

ヨム・キプール戦争は、今日のイスラエルとハマスの対立とは明らかに異なる。それは、主権国家と通常の軍隊との間の戦争だった。仕掛け人であるエジプトとシリアは、先の戦争でイスラエルに奪われた領土を取り戻そうとしていた。冷戦の影で戦われた。モスクワとワシントンは戦闘を支援し、停戦を交渉して終結させた。しかしイスラエル人にとっては、ハマスの攻撃という屈辱的な不意打ちは、1973年のエジプト大統領アンワル・サダトの衝撃的な侵攻を彷彿とさせる痛々しいものだった。

類似点はさらに深い。当時も今も、イスラエルは戦争勃発前、驚異的な経済的繁栄を謳歌していた。当時も現在と同様、戦争勃発前、イスラエル国民は奇襲攻撃の可能性を知っていたが、国境に関しては相対的な自信が国の政治を支配していた。イスラエルは1967年の戦争で圧勝し、アラブ6カ国を撃退して領土を4倍に広げた。古代以来、ユダヤ人がこれほど安全だと感じたことはなかった。聖書には、古代ヘブライ人がエリコを征服するのに7日間を要したと記されている。

しかし、1967年の勝利は最終的な勝利ではなかった。エジプトは損失を取り戻そうと決意し続けた。一方、イスラエルの自信は、6年後に卑劣な攻撃を仕掛けるための一連の想定へとイスラエルを導くことになった。

イスラエル軍がエジプト第3軍を包囲し、ダマスカス近郊の砲撃圏内に入った後、停戦によってヨム・キプール戦争は終結した。しかしイスラエル国民は、戦争勃発を予見できなかった政府の破綻を許しがたいと考え、政府は自らの過ちについて広範な調査を開始せざるを得なくなった。委員会での証言の中で、イスラエルのある諜報部員は、軍が1973年の戦争はあり得ないと誤った判断を下したのは、スエズ運河付近のエジプト軍備増強の明白な兆候ではなく、「カイロで何が起きていたかに基づいて」、言い換えれば、高官レベルの話し合いを盗聴することを可能にした最先端の監視技術に基づいてであったと認めた。

銃声が聞こえなくなれば、イスラエルが同じような調査を招集するのはほぼ確実だ。1973年の調査委員会の報告書は2,200ページにも及んだが、1973年の大きな教訓のいくつかは、イスラエルが当時も今も理解する必要があるにもかかわらず、学ばれずに終わってしまったのかもしれない。

シュツパフ

六日間戦争後、イスラエルの軍事力は爆発的に増大した。1967年から1973年の間に、とりわけ178機のA-4スカイホーク戦闘機、110機のF-4ファントム戦闘機、そして2,000台近い戦車が追加された。同じ期間にイスラエル経済は85％という驚異的な成長を遂げた。六日間戦争終結後数カ月間、1948年当時のイスラエル国境沿いには、「危険！BORDER AHEAD "と書かれた標識が点在していた。そのうちのひとつには、誰かがスプレーでBORDERの前にNOと書いたものもあった。

しかし、実際には紛争は終結していなかった。終戦からわずか数週間後、エジプトはイスラエル海軍の駆逐艦エイラット号を撃沈し、イスラエルはスエズ運河沿いのエジプトの都市を砲撃して報復した。当時のエジプト大統領ガマル・アブデル・ナセルはイスラエルの国家承認を拒否し、紛争中にイスラエルが占領したシナイ半島の奪還に専心し続けた。紛争は1969年から70年にかけても続いた。40人のイスラエル人と数万人のエジプト人が殺された。ソ連がエジプトに進化したSAM-3ミサイル・システムを供与すると、イスラエル空軍は驚くほど多くの航空機を失うようになった。米国と国連による和平仲介の努力は失敗に終わった。

1970年、ナセルが心臓発作で急死した後、サダトが後を継いだ。サダトはナセルの "プードル "と悪評された。街頭デモでは、群衆が "巨人は去り、ロバが後を継いだ "と唱和した。外国の指導者たちもサダトを酷評した。サダトは「過渡期の指導者」だと公言していた。1970年、イスラエル情報機関の調査はサダトの「知的レベルは低い」と結論づけ、1972年末の更新では「弱い」と付け加えた。1971年から1973年までエジプトの国家安全保障顧問を務めたムハンマド・ハフィズ・イスマイルは、キッシンジャー米国務長官から、エジプトが再び戦争を始めたら「イスラエルが再び勝つだろう。

イスラエルの指導者たちはエジプト軍全体を過小評価していた。

しかし、サダトはすぐに、彼が弱者ではないことを示した。1971年のクーデターの失敗、破綻した経済、1967年のエジプトの敗戦の恨みを晴らそうと躍起になる軍人たちに直面し、サダトは戦争に踏み切らざるを得ないと判断した。国境を比較的静かな状態に保ち、既成の将校を傍観させ、下級生ながら高く評価された職業軍人であるサード・シャズリーを筆頭とする有能な将官グループを任命したのだ。

シャズリーと選り抜きの将校たちは、エジプト軍の長所と短所を冷静に評価し、イスラエルに対する綿密な戦争計画を練り上げた。シャズリーは、少なくとも手始めにシナイ半島全域を占領する必要はなく、敵陣にわずか6マイル進出して死傷者を出し、イスラエルに衝撃を与えるだけでよいと結論づけた。その後、消耗戦と国際的な圧力によって、イスラエルは1967年以前の国境線まで撤退せざるを得なくなるだろうと彼は考えた。彼は、ソ連の地対空ミサイルを使ってイスラエル空軍を無力化し、肩から発射するロケット弾を使ってイスラエルの装甲を無力化する方法を考案した。

何よりも、シャズリーの計画は奇襲の要素に依存していた。彼は、ソ連が1968年にチェコスロバキアに侵攻した際、西側の情報機関を欺くのに成功した戦術を採用した。攻撃に先立って訓練を繰り返し、通常の軍事活動と攻撃準備の区別を観測者につけにくくするのだ。エジプト軍は、1973年1月1日から1973年10月1日までの間に、スエズ運河沿いで22回以上も軍隊の動員・動員解除を繰り返した。

23回目の出動となる10月6日に、陸軍が運河の横断を命じられることを知っていたのは、エジプトの一握りの軍幹部だけだった。後にイスラエルが捕獲した8000人のエジプト軍兵士のうち、1日以上前に攻撃計画を知っていたと答えたのは1人だけだった。他の兵士は皆、同じ日の朝に知ったのだ。

しかし、これは物語の一部でしかない。イスラエルはエジプト軍全体を過小評価していた。イスラエルは国境を越えてエジプトの活動を監視するために一連の砦を築いたが、指導者たちは、カイロの軍隊が電光石火の攻撃で彼らを圧倒するほどの能力があるとは不可能だと考えていた。1971年、イスラエルは、エジプトが16時間で3個歩兵師団と700台の戦車をスエズ運河に移動させるという戦争ゲームを行った。ある最高将官は、この活動を否定し、「彼らが（それを）やり遂げる可能性は10％もない」と述べた。アラブの兵士は「現代の戦争に必要な資質を欠いている」と彼は付け加えた。

理論による盲目

イスラエル紙『Yedioth Ahronoth』の2005年の調査によると、1969年のある日、長身で完璧な身なりの男がロンドンのイスラエル大使館に入ってきて、モサドの諜報員と話をしたいと頼んだ。「あなたのために働きたい。「あなたの夢の中でしか得られないような情報を提供しよう。大金が欲しい。私を信じて、あなたは喜んで支払うだろう」。

というのも、その男はアシュラフ・マルワン＝アンワル・サダトの大統領秘書で、ナセルの娘婿だったからである。Yedioth Ahronothの調査によると、彼はイスラエル人から現在のドルで2400万ドルを受け取っていた。(これを考慮すると、スパイ活動で最も多くの報酬を受け取ったアメリカ人として知られるのはCIAの二重スパイ、アルドリッチ・エイムズで、彼は現在の400万ドルに相当する報酬しか受け取っていない）。

他の諜報活動の中でも、マルワンは、イスラエルの軍事計画者がヘブライ語で「コンセプツィア（概念）」という言葉を作ったほど重要だと思われる情報をハンドラーに伝えた。そのコンセプツィアとは、エジプトはイスラエル空軍に対抗できる進化したソ連製戦闘機を手に入れるまでは戦争をしないというものだった。当時も今も、イスラエルの軍事計画のチェス盤では、機体にダビデの星が描かれた戦闘機が最大の駒とみなされている。(実際、1967年から1972年の間、イスラエルはGDP全体の10％を空軍だけに費やしていた）。サダトはモスクワとソ連のジェット機を獲得する契約を結んでいたが、エジプトに引き渡されるのは1974年後半になってからだった。また、1973年当時、ソ連製ジェット機を操縦できるパイロットを養成するには少なくとも1年はかかったため、イスラエルは数カ月は安全だと考えていた。

自分たちの理論に固執していたイスラエルの軍事計画者たちは、戦争の兆候のほとんどは軍事訓練と一致していると考えていた。

イスラエルの高官の中には、マルワンや自慢の監視技術に頼りすぎることを心配する者もいた。あるイスラエル大佐ヨシ・ランゴツキーは1973年半ば、若い情報将校（後にイスラエル首相となるエフド・バラク）に、なぜイスラエルの指導者たちの多くが「戦争が起きる、起きない、と言う度胸があるのか理解できない」と愚痴をこぼした。私たちは皆、自分たちがいかに少ない情報しか持っていないかを知っているのに、彼らはそれを精巧な理論にまとめ上げる」。しかし、国家のトップは、情報収集の優越性がマルワンの思い違いの可能性に安全装置をかけていると感じていた。イスラエル軍の情報部門の責任者は、イスラエルのスパイ能力は「コンセプツィアに間違いがあれば教えてくれる保険だ」と語った。

1973年秋、当時エジプトやシリアと対立していたヨルダンのフセイン国王は、イスラエルのゴルダ・メイル首相と秘密裏に会談し、これらの国が戦争を準備していると警告した。イスラエルの諜報機関は、警戒すべき45の「戦争の兆候」を特定し、1973年10月初旬には30以上が現場に存在していた。しかし、コンセプツィアから抜け出せなかったイスラエルの軍事計画者たちは、これらの兆候のほとんどは軍事訓練と一致していると考えていた。マルワンは前夜まで、差し迫った攻撃を警告しなかった。

ヨム・キプールの日、イスラエル情報部はエジプトのアンワル・サダト大統領がコンセプツィアを持っていることを突き止めた。サダトの軍隊はスエズ運河を横断し、イスラエル軍を攻撃し始めた。イスラエル軍がサダト軍を包囲したため、最終的にサダト軍は阻止された。しかし、イスラエルに衝撃を与えるという彼の計画は成功した。

明るい余波

ヨム・キプール戦争と今日のダイナミックな動きには、驚くほどの類似点がある。ハマスがエジプトと同様の戦術をとったのは、気をそらす訓練を強化し、イスラエルとガザの国境沿いに戦闘員を移動させ、過去数カ月にわたって撤退を繰り返したからだ。イスラエルはまた、ハマスの自信、計画能力、監視回避能力を著しく過小評価していた。ハマス幹部のアリ・バラカは、10月7日に戦闘員が国境フェンスを突破するよう命令されることを知っていたのは、ハマスの一握りの幹部だけだったと語っている。

イスラエルとハマスの戦争が終わった後、イスラエルはほぼ間違いなく調査委員会を招集するだろう。1973年11月18日、イスラエルはヨム・キプール戦争の失敗を調査するため、最高裁判所長官シモン・アグラナトを委員長とするアグラナト委員会を招集した。調査委員会は90人の証人から話を聞き、さらに188人から証言を集めた。その報告書は、コンセプツィアへの過度の依存と、あまりにも少ない貴重なエジプト源からの「黄金の情報」と称されるものを非難した。

その後のイスラエルにおけるすべての調査委員会は、アグラナット委員会の影に隠れて存在している。アグラナット調査委員会は、イスラエル人が現在「首切り文化」と呼んでいるもの、つまり、責任者を缶詰めにすることで失敗の再発を防ごうと、大量解雇や辞任で破綻に対応する本能を確立した。委員会が1974年4月2日に予備報告を発表してから1週間後、ミールは辞任を表明した。イスラエルの国防相、外相、財務相も交代した。ミールは、ヨム・キプール戦争におけるイスラエルの英雄といえば、軍参謀総長のダヴィド・エラザールだと発言した。しかし、彼も解雇された。

今日のイスラエルとハマスの戦争に続く調査委員会は、イスラエルの現指導部に対してさらに厳しいものになるかもしれない。アグラナート調査委員会は、イスラエルが戦争の紛れもない兆候を無視したことを明らかにした。しかし、イスラエルの核心的な誤った思い込みは、1973年のそれよりもさらに広範囲に及び、約20年前にガザから撤退して以来イスラエルが採用してきた戦略の核心に関わるものだった。

最悪の紛争の後でも、戦争に巻き込まれた場所をより良くするチャンスはあるかもしれない。

イスラエルがガザから撤退すれば平和が訪れるとは誰も信じていなかったが、関係者は、抑止力（攻撃のたびに鋭く対応すること）と経済的インセンティブによって、国境を比較的静かに保つことができると考えていた。2022年、イスラエルは6万7000台のトラックでガザに物資を送り込み、2万人のガザ人にイスラエルで働く許可を出した。イスラエルの指導者たちは、ハマスがこれほどの物質的支援を失うリスクを冒すはずがないと考えていた。

しばらくの間、この前提は正しいと思われた。ハマスとイスラエルは時折ロケット弾を撃ち合い、何度かミニ戦争を繰り広げた。しかし、紛争は管理可能なように見え、イスラエルの納税者は数十億ドルを節約できた： 2005年以前のイスラエルのガザ占領では、パレスチナ人を支援するためだけに年間約15億ドル、2000年代半ばのイスラエルのGDPの1％が費やされていた。この財政負担の解放が、2005年から今日までの間にイスラエルのGDPがほぼ4倍になったことに大きな役割を果たしたことは間違いない。イスラエル軍がガザに常駐しなくなったことで、イスラエルの死傷者も激減した。

しかし、ハマスの攻撃で明らかなように、イスラエルは安全保障上の問題を解決したわけではなかった。イスラエル政府関係者は、敵からの最も深刻なリスクを事実上無力化できたと早合点し、さらに重要なことに、敵の動機を誤解していたのかもしれない。

ウィノグラード委員会（2006年のヒズボラとの戦争に関するイスラエルの調査委員会）の証言で、イスラエルの元首相でクネセットのメンバーであるシモン・ペレスは、「戦争とは失策の競争であり、最大の失策はそもそも戦争に巻き込まれることだ」と述べた。しかし、最悪の紛争であっても、その余波のなかには、戦争に巻き込まれた場所をより良くするチャンスがあるかもしれない。ヨム・キプール戦争の後、エジプトとイスラエルは和平協定を結び、イスラエルはシナイ半島を返還し、エジプトはイスラエルの存在を正式に承認した。

同じような和平の機会が、今日にも存在するかもしれない。ガザでのイスラエルの作戦がハマス政権を崩壊させた場合、誰かがガザの権限を引き継がなければならない。おそらく、エジプトとサウジアラビアが主導する多国籍アラブ軍が治安維持の責任を負い、ラマッラーを拠点とするパレスチナ自治政府のガザへの復帰を助けることができるだろう。ヨム・キプール戦争のストーリーは、多くの古い前提が覆されたとき、有害な前提、たとえば2国家解決やパレスチナ領土における効果的な統治はありえないという前提もまた、変えられることを示唆している。